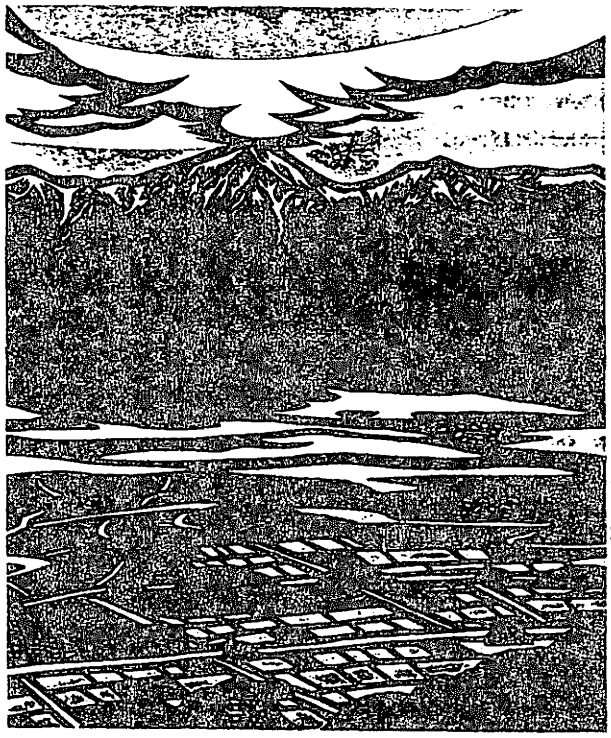
95年度 プレ冬合宿・冬合宿
報告書



SHINSHU UNIVERSITY

ALPINE CLUB

目　次

○プレ冬合宿　2～16

・プレ冬合宿を終えて　2

・行動記録　2

・係からの報告・反省　4

・個人の反省と感想　9

○冬合宿　17～43

・冬合宿を終えて　17

・行動記録　18

・係からの報告・反省　26

・個人の反省と感想　35

○改正された規約　44～45

・岩トレ規約　44

・遭難救助に関する規約　45

○95年度総括　46

○名簿　48

○作文コーナー　49

プレ冬合宿を終えて

山内　哲文

今回は天気が悪く、計画通り行けずに八方尾根往復だけにおわってしまって残念である。しかし、ほほを突きさすような厳しい天候下での行動というものを経験できた事は良かったと思う。寒風吹きすさぶあらしのまっただ中でピーク（唐松岳）に立つのもまたそれはそれでいいものだ。これからもいろんな困難が我々の前に立ちはだかることだろうが、恐れる事なく、この手でぶちこわして乗り越えてゆこう。

☆行動記録

プレ冬合宿　記録：長澤　徹哉

12月1日　ロマンスリフト　9:25 ⊛ -
八方山荘　10:10 ⊛ -
八方池　11:40 ⊛ -
丸山ケルン　14:20 ⊛ -
2460m T.S1　14:40 ⊛ -

構成：CL山内、SL松本、
松澤(5)、伊藤(3)、岸、長沢、前原(2)
磯部、小林、堺、花谷、原田(1)

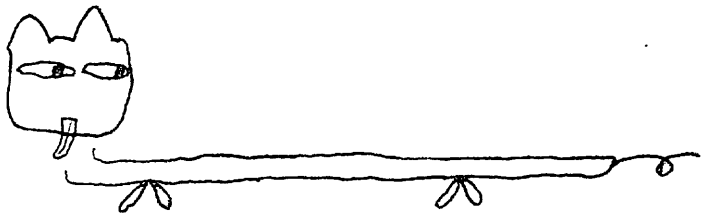
感想：今日は1日中風が強く吹きとても寒かった。車での移動に時間がかかったのと、時々出くわした豪雪のオニ・ラッセルによって、途中でテントを張ることになった。明日までテントがもちますように。そして明日天気になれ。
ナンシー天のポールが割れた。　岸記す

12月2日 T.S1発 7:30 ⊗ - 岩場にさしかかり、fixを出す(15m弱) ◎ - 唐松山荘
11:45 ⊗、12:30 ◎ 発 → 唐松岳
13:05 ⊗ 吹雪! - 唐松山荘(T.S2)
13:30　構成は昨日に同じ

感想：暴風雪の唐松岳山頂は厳しく、写真を撮ってすぐに下りた。fixが出て、雪山では迅速な行動が大切と確認、行動自体は短かい日だったが、やはり雪山はコワい。　長澤 記す

12月3日 T.S2にて停滞 午前 ⊗ 午後 ⊗

12月4日 T.S2発 6:00 ◎ -
岩場(15m弱)にてfixを張る
fix隊分かれるも、本隊が追いつく -
丸山ケルン上 8:20 ⊗ -
八方池下 9:20 ⊗ -
各自リフトまで自由に下山 ①



☆係からの報告・反省

装備

・消費、破損したものについて

竹ポール ― 2本 残置
竹ペグ ― 1本 残置
ダンロップテントポール 1本破損
MSRコンロ 1台不調・要修理

MSRマンドリン 1本分2針、損失
ローソク(30cm位) 1 3/4本消費
メタ 15本と1/2本 消費
ホワイトガソリン 約3.6ℓ消費

天気図用紙 5枚使用
高層天気図用紙 3枚使用

・ホワイトガソリンの1人当たり消費量

3.6ℓ / 3泊 = 1泊12人 1.2ℓ ➡ 約100cc / 1人1泊

予定通りの使用量であったが、自分ではもっと少なく(90cc)押さえられると思っていた。

・反省

残置・紛失したものが少なく良かったと思う。テントは穴・破れがないか冬合宿の準備のとき、しっかり確認・修理したい。

高層天気図を書くためのセットは放送されていることを直前になって知ったため用意が遅れた。

今回は準備の日を特別に1日設けたりしなかったため、持っていく装備の点検がおろそかになったと思う。今回何も重大な失敗が無かったので良かったが、全ての装備1つ1つを自分の眼で見て回る位の確認をしたかった。

テントを2張しか持っていかなかった。6人用テントとは言え、冬場に6人寝るには狭かったと思う。その分かなりの軽量化にはなったと思う。

予備の電池等、団装の予備品を使うときは、装備の係に言ってほしかった。または、記録しといて、リーダー会等で報告してほしい。

今回の山行での不備の点は冬合宿では改善しなければならない。そうするのが係の義務であるし、山行を行なうための「学習」だと思う。冬合宿の装備の準備は失敗ゼロにしたい。

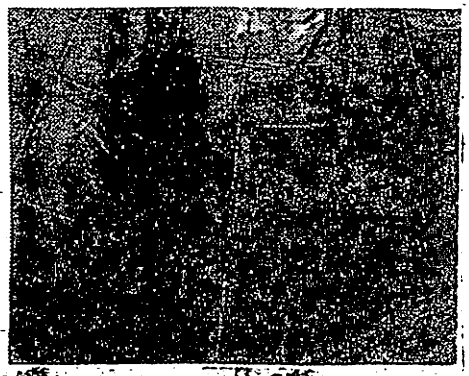
〈文責・前原 徹〉

Essenの反省… 自分がEssenの係だったにもかかわらずビシッと務め上げる事ができなかったため、U太郎さん人に少なからずEssenの仕事を任かせる事になったのが非常に残念だった。冬合宿ではfrom first to finishまで完璧を期したい。今回使ったアルファ米1人1.5合というのはまずまずの量だった。冬合宿でも生かすようにする。ペミカンが少し多すぎたのではという声も聞かれたので冬合宿では肉の量を1人70gにする。調味料袋はより使い易い物になるよう努力する。レーションの菓子がしけてしまったのは早く作りすぎたためである。朝食のラーメンの量も増やしたが、冬合宿では団箱をすこしでも小さくするためラーメン1人1袋とする。

2年 岸 秀蔵

プレ冬合宿　気象報告

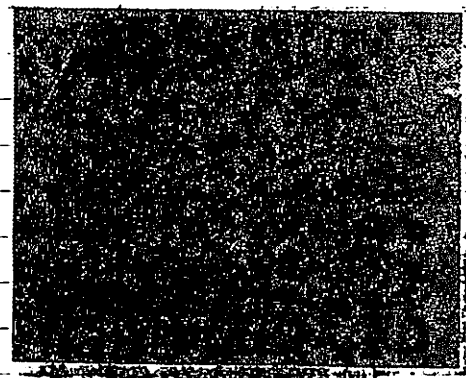
花谷 泰広



12月1日

下界でも雪が降っていたこの日，山は荒れていた。天気図ではそんなに冬型は強そうではないが，雲を見てみると，中部山岳は雲におおわれている。

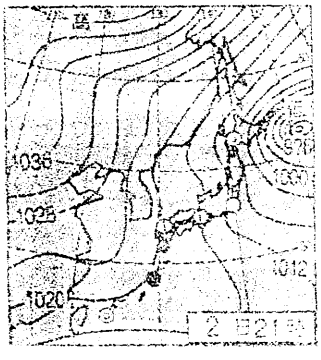
9:00 うさぎ平　雪
13:50 丸山ケルン　雪，風強い
14:45 T.S　雪，風強い

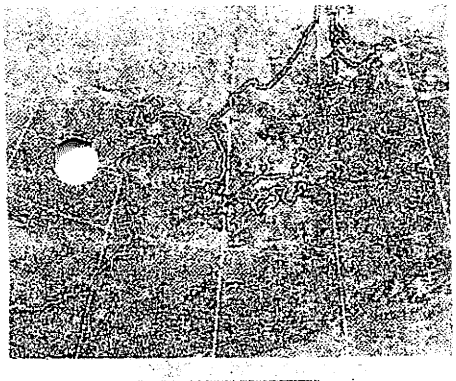


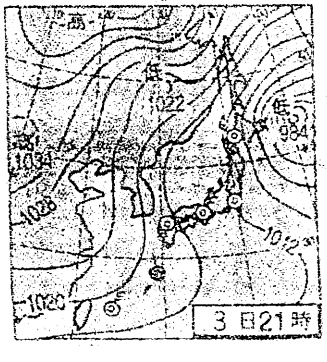
12月2日

昨日と天気図を比べてみると，やや冬型が強まっている。また，寒気の吹き出しを示すすじ状の雲が見える。
この日は一日中吹雪の中を歩いた。風が弱くなる事はほとんどなかった。

KYOKUTO

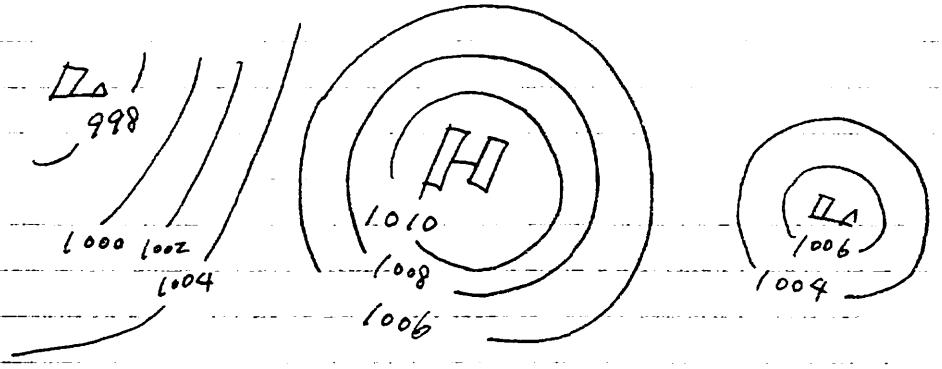

1036
1028
1020
1012
2 日21時




1022
984
1034
1028
1020
3 日21時

気象係　反省

まず、気象係であるにもかかわらず、ラジオ及び天気図用紙がどこにあるかを確認するのを忘れてしまっていた。そのせいで天気図が書けなかったということはなかったが、ちゃんとわかっていなければならない事だった。合宿中は4人に天気図作成を指示したが正しい天気図が書けている人は少なかった。毎日の練習が大事であると思う。



上図のような配置の場合、高気圧の最後の等圧線は低気圧のそれよりもこんp気圧が高くなければならない。上図の場合、Hの線の最後は1006hpで、Lは1004hpというような感じである。このような基本的な事を理解することでより完璧な天気図を描けるようになるのではないかと思う。

花谷泰広

KYOKUTO

<プレ冬合宿 会計報告>

[収入の部]
第1回目 8,000 × 12人 = 96,000
第2回目 2,000 × 12人 = 24,000

合計 120,000

[支出の部]
交通費 八方スキー場ゴンドラリフト(荷物代込)
12,020
ペアリフト(荷物代込)
6,140
往復車代
1500 × 3人 = 4500
駐車場代 八方スキー場
2000 × 2日分 + 1000 × 1日分 + 1台
= 5,000
遠見尾根はタダ

小計 27,660

食費 白米 330 × 5日 × 12人 = 19,776
昼めし・夕飯・おやつ 35,175
ペミカン 3,732

小計 58,683

装備 赤リボン 870
電池 1,483
その他 7,123
(ケサポール・白ガス・赤リボン・ガムテ)

小計 9,476

薬

小計 2,389

合計 98,208

[差引] 21,792 ÷ 12人 = 1,816

・差引の1816円は冬合宿の合宿代にまわす。

☆個人の反省と感想

プレ冬合宿　感想と反省

ひさしぶりの白いわは、やっぱり楽しかった。
景色はたのしめなかったけれど、雪洞ですごした夜はたのしかった。スキー場の滑走(?!)も、すばらしかった。
一年生は、今回経験したことを充分生かして冬合宿がんばってほしい。上級生少ないけど、つかまえて、どんどん山にいこう！
すべてにおいて、けじめは必要だと思う。
気を抜いていいところと、そうでないところをしっかり区別して、事故なく冬山を楽しんでください。

1995・12・9　　杉沢朋子

プレ冬合宿の感想・反省

4年　松本　穂高

高層天気図の読図をしっかりできるようにしたい。それにしても吹雪の中を歩くのはいやだ。青空の下できらめくクラストにアイゼンをきかせて歩きたい。冬合宿はぜひ成功させたい。

プレ冬の反省

山内　哲文

やはり天候判断が難かしいと思った。高層天気図や観天望気など、もっと勉強しなければいけない。また、人を連れていく立場の者としても、自分はまだまだ力が足りないと感じた。成長しよう。まだ冬山シーズンははじまったばかりなのでこれから5どんどん山へ行こう。

＜プル冬合宿反省と感想＞　伊藤勇太郎

今回の合宿は悪天のため行動できずじまいという感じで、八方尾根はコンパスワークと読図ができれば何てことなかったと思う。ケイポールをもって歩くのに手まどったが、準備の段落でもちやすいようにしておくべきだった。また冬山は天気で登れるか登れないかはっきりきまってしまうので、もっと天気図を読めるようにならなければいけないと思った。

2年生について言うと、長沢と岸はもっと積極的に前に出てほしい。1年生にアドバイスしてあげたり、リーダー会で自分から意見が言えるようになってもらいたい。たかだか1～3年間程度の経験しかもち合わせていない集団で、おたがいに足りない所や間違いがあって当然なのだから協力しなければいけないと思う。
そういう意味で前原は積極的に行動し、意見を言っていたと思う。ただ、自分の考えと違う意見を言われた時はふてくされるのではなく、他人の意見も聞けるようになってほしい。

1年生は上級生が見ていないからとか、あいつがやってくれるからといってずるをするのではなく、気づいたことは自分でやれるようになってほしい。

プレ冬合宿反省と感想

岸秀氣

今年のプレ冬は雪が多いと聞いていたがスキー場が上まで圧雪してくれたため、長くてしんどいラッセルが非常に少なかった。しかし、日頃のトレーニング不足のため、深雪のラッセルはとても苦しかった。2年目の冬山だが自分自身、経験が乏しいため、クラスト斜面やラッセルでも、まだ慣れていなかった。かなりシビアな吹雪だったが、なんとか唐松岳に登れたのは良かった。読図はまだまだ未熟かもしれないが、道をまちがえることはなかったので良かった。2年生としていちい1年生をリードしていく事が出来なかったと思う。冬合宿ではもっと引張っていけるようにしたい。そのためにトレーニングと読図と天気の勉強をする。

信濃毎日新聞

統合　1996年（平成8年）1月18日（木曜日）

こらむ

感動を奪った

山中の飛行機

この年末年始に私は十日間ほどの日程で北アルプスを登山した。初日から三日間の悪天の後、待ちに待った快晴の日がやってきた。真っ白に輝く山並みの中に、黒々とした岩肌を見せる尖峰（せんぽう）群が迫り、私たちの目を奪った。私たちはだれもいない尾根をゆっくり登っていた。その時である。突然のごう音に気が動転し、目の下をものすごいスピードで一機の飛行機が飛び抜けていくのが見えた。その後も、その飛行機は静寂を切り裂き、白い峰々の間を縦横無尽に飛び回り、五分ほどして去っていった。

「露朋だ」と一瞬思ったが、違った。自分の目が野生生物に影響を与えるはずがない。不安定な積雪の斜面では露朋を誘発することもあるだろう。こんなことが許されているのだろうかと、私は疑問に思った。

聞くところによると、夏などもこんなことはよくあるという。素晴らしい感動の時を一瞬にして奪った飛行機を、このまま放置するわけにはいかないと思う。

松本市　穂高（22＝大学生）

プレ冬合宿の感想と反省　長澤 徹哉

唐松・五竜を目指した山行であったが、結果は唐松岳を踏んでの往路下山となった。それだけ厳しい天候であったのだが、得るものは多かった。行きの雪深いラッセル、岩場のFix通過、風雪の吹きつける（周りがまっ白の）唐松山頂と、かなり歯ごたえのあるメニューだった。まさに冬本番を味わえてよかった。

そんな中、帰りのFix隊では流れを把握していなくて手間取り、本隊をかなり待たせてしまったことが反省点だ。張り方は覚えたので、これからはすばやく行動できるようにしたい。

山々はすっかり雪化粧している。今年もそんな姿が数多く見れるとよいな。ホワイト・アウトはごめんだぜ。

プレ冬合宿の反省と感想　（II年・前原 徹）

山行1日目の夜からカゼ気味で2日目から調子が悪くなった。3日目ていたいでまあまあ回復した。山で病気になるのは自己管理がすかったからで問題である。

2日目、Fixを張るところで非常に手間取ってしまったが、場所がとても危険という訳でなく、その結果、役割の分担などがうまくできなかった。適当にやってしまった結果も時間の浪費につながったのではないかと思う。

唐松岳の直下でフカフカ雪の雪ぴがありそうな（本当はたいした雪ぴではなかった）場所で、迷った結果1ーザイルで行ってしまったが、すこしでも不安を感じたらザイルを出すようにしたほうが良かったと思う。

ルートファインディングについてだが先頭にたったとき、事前にしっかりルート学習をしておいたので自分はいちいちコンパス確認等しなくても進めると思った。また一瞬のガスの晴れ間から尾根も確認できていた。それなのにくどい位に上級生からコンパス確認を言われたのは自分には上級生からの信頼度がほとんど無いのだと思い残念だった。

エッセンでとまどっている1年生に対して自分で直接手を出しすぎたと思う。もっと指示を与えた方が良かったと思う。

雪洞の掘り方等も教えることができて良かった。

何より悪い天気の中で動けて良かった。よい経験になったと思う。次の山行に反省を活かしたい。

No.
Date

プレ冬合宿　反省と感想　磯部和哉

山岳会の1年生には、年5回の合宿がある。今回の合宿は4回目の合宿だった。合宿の前は、準備があわただしく、どきどきするものだ。今回の合宿は、運悪く骨学試験の直前になってしまった。そのためますますあわただしくなり、雪崩などの資料もゼミ以外の知識はほとんどないままになってしまった。生活面では軍手をなくしてしまったのが残念だった。エッセンをてきぱきできるようにしなければいけないと思った。そのためにMSRの確認をきちんとやるべきだと思う。2日目の朝マットがなくなってしまった。マットがないと夜寒くなってしまう。今回は特に問題なかったが、自分の装備は、常に自分で管理していなければいけないと思った。

No. －

プレ冬合宿の反省と感想

95L1044A　小林茂幹

反省

行動中の反省は、歩行技術、レイヤード、読図にあると思う。アイゼンで何カ所もスパッツを破き、ワカンはすぐにゆるんでしまう。ラッセルの技術も全然だった。また、ナイロンのダブルヤッケにもかかわらず、ジャージを汗で濡らしてしまった。今回は何もなかったが、もし不意に厳しい状況におちいった場合を考えるとやはりまずかった。読図は、技術以前の問題で積極的に地図を見ることができなかった。体力の不足も影響している。

生活では、設営，撤収もそこそこできたように思う。essenはもう少し早くできるはずである。また、用足しにも真剣に取り組むべきことを痛感した。

感想

初めての冬山である。驚くことが多かった。凍るマツ毛、ワカンでの歩行、深いラッセル、吹雪の中での設営からテント生活。唯一印象に残る景色と言えば、星と月光に浮かびあがった、山波だった。しかし、プレ冬の合宿としての意義は、十分あったと思う。でもやっぱり晴れの中、唐松と五竜に立ちたかった。

No.

感想と反省　　堺崇行

- ラッセルがきつかった。他の人のように長く進めなかったような気がするので、もっとトレーニングをしなければいけないと思った。
- Fixのところを降りるのがこわかった。ずいぶん時間がかかってしまって他の人に迷惑をかけてしまった。次からは迷惑をかけないように努力したいと思う。
- わかんの調子が少し悪かった。ゆるまないように作りなおそう。
- とにかく、もっと強くなりたいと思う。冬合宿までの間少しでもいいから走ろうかなと思っている。

プレ冬合宿の反省・感想　　原田亮介（1年）

プレ冬は僕にとって初めての冬山だった。それまでは冬山にはつかみどころのない恐怖感しか持たなかったが、今回で少なからず解消されたと思う。それと同時に意識的な面、体力的な面それから装備の面で改善すべき点が山ほどあることに気づいた。これらをリストアップして冬合宿までに改善できる点は直してゆきたいと思う。

冬合宿を終えて

「とにかく皆無事に下山できてよかった」―― これが私の下山直後の率直な感想である。2年前のあの悪夢のような事故を再び起こすまいと、そのことが一番の心労だったので、9日目にして全員何事もなく横尾に着いた時は、とてもうれしかった。それに加え、予定していたルートをすべて歩いたという充実感も、もちろん大きかった。

思えば私が入学してからの3回の冬合宿は、すべて途中断念に終わっている。それは私に「冬合宿は完歩などできないものなのだ」という意識を植えつけてしまっていた。その通り、考えてみればみるほど冬合宿は困難なことの連続である。冬山経験がほぼ初めての1年生を多く連れていくこと、それはすでに経験者となっている上級生の予想もできないようなことが起こる可能性があることを意味する。また大人数で行くゆえの困難さも無視できない。当然、危険地帯の通過や fixの通過には時間がかかり、少人数の時よりも行動が遅く、長くなる。またメンバーのたった一人が、病気、けが、やけどなどになれば、そこで合宿はおしまいである。11人がこの長い期間、誰一人としてなんらの不調を起こさなかったこと自体、驚異なこととさえ思えるのである。（現に私が1年の時には、私が凍傷になりかけたために途中断念、下山したという苦い思い出がある）

ともあれ今回の合宿は成功裡に終わったと言えようが、部員はこれに満足することがあってはならない。冬合宿は冬山登山の基礎を学び、教え、伝えるものにすぎないからである。この冬合宿での経験をもとに、より困難なルートを目指していかなければ、山岳会の部員とは言えない。各人のより困難なルートへの挑戦を期待する。

ずいぶん偉そうに私見を述べているが、こんな自分でも冬合宿を成功に導ける身に育ててくれたのは、言わずもがな私の先輩方たちである。その先輩方を育てたのは、またその先輩方である。一見あたり前のことだが、このことの意義深さを常に再確認しなくてはなるまい。つまり自分が先輩に教わったことは、自分の後輩に伝えなければ、このクラブはたちまちにしてなくなってしまうのだ。卒業後自分がヒマラヤに行きたいと思った時、そのような過程をないがしろにしてきたならば、いっしょに行ってくれる現役部員はいないだろう。というよりヒマラヤに行ける能力のある現役部員はいなくなっているだろう。そういう悲しい状況にならないよう、今の現役部員は自分の知識や技術を積極的に後輩へ伝えていく努力が必要だ。

先程も述べたが、今回の冬合宿が成功したからといって満足してはいけない。これは冬山へのほんのワンステップにすぎないのだから。

CL　松本　穂高

☆行動記録

195 冬合宿 記録

12月23日 (土) 準備・ミーティング

12月24日 (日) 0日目 アプローチ

6:30	BOX 集合	①
6:35	BOX 出発	①
6:52	信大西門 出発 (バス)	①
7:45	松本駅 出発 (JR)	①
9:54	中津川駅 到着	⊙
10:04	〃 出発	
10:41	多治見駅 到着	⊙
10:51	〃 出発	
11:18	美濃太田駅 到着	●
11:46	〃 出発	
14:46	高山駅 到着	⊙
15:30	〃 出発 (バス)	⊗
17:30	新穂高温泉 到着	地吹雪

12月25日 (月) 1日目

5:00	起床	⊗
6:30	新穂高出発	⊗
	(この間4回の休みあり)	
11:00	ワサビ平 到着	⊗
13:30	T.S (1500m付近) 到着	⊗

〈偵察隊行動記録〉

14:20	T.S 出発	⊗
15:05	雪崩発生のおそれがあり 偵察終了	
15:35	T.S 到着	⊗

偵察メンバー: 松本, 山内, 伊藤, 前原, 磯部, 堺

KYOKUTO

12月26日（火）　（2日目）

5:00　起床　⊗

7:25　T.S 出発　⊗

出発してすぐにスノーブリッジを起す。

この時にFIXを使用（50m）

10:43　秩父沢前到着　⊗

秩父沢までで1カ所小さな谷を越える時にFIXを使用（50m）

10:55　秩父沢前出発

12:10　秩父沢到着　⊗

FIX（105m）を使用

15:00　弓折尾根上 T.S 到着　①

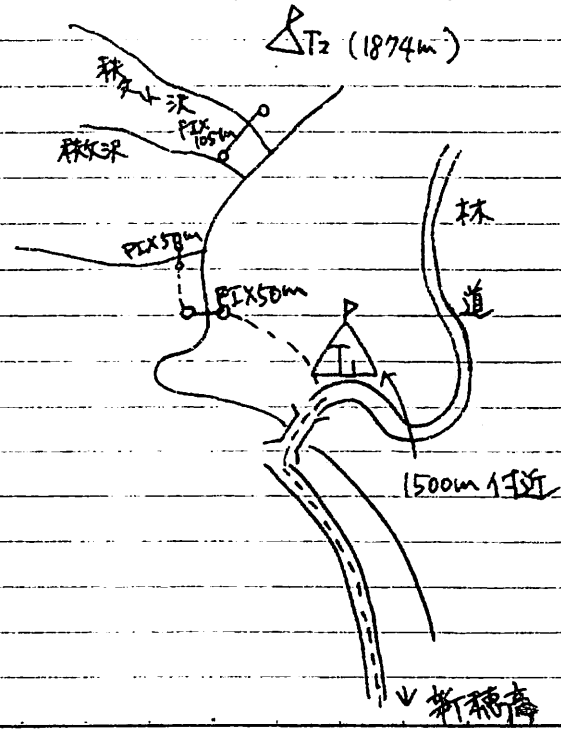
（1874m地点）

〈偵察隊記録〉

15:20　T.S 出発

15:55　T.S 到着

メンバー：伊藤、山内、岸、花谷、原田



KYSKUTO

12月27日　（水）　3日目

5:00　起床　⊗
7:20　T.S 出発　⊗
8:25　弓折尾根2100m地点，到着　⊗
8:35　〃　出発
10:00　鏡平手前2300m地点，到着　⊗
10:10　〃　出発
11:00　鏡平 T.S（小屋のそば）到着　◎

リーダー会があり，偵察隊を出すことになった。

〈偵察隊 記録〉

11:45　T.S 出発　◎
12:30　夏道との分岐　⊗

FIXを準備し，稜線に出るまでの間に
90m＋50m＝140m 設置した。

14:30　稜線に出る　⊗
15:30　T.S 到着　◎

メンバー：松本，山内，伊藤，長沢，岸

12月28日　（木）　4日目

5:00　起床　○
7:12　T.S 出発　○
7:40　夏道分岐 到着　○

FIX通過（90m＋50m＝140m）雪崩ビを使用

9:30～　弓折岳 到着　○

ここから，先発隊と後発隊に分ける。

〈先発隊 記録〉

10:05　弓折岳 出発　○
11:20　夏道と樅沢岳への尾根との分岐 到着　○
11:35　〃　出発
12:12　双六小屋　○

メンバー：松本，伊藤，前原，花谷，小林

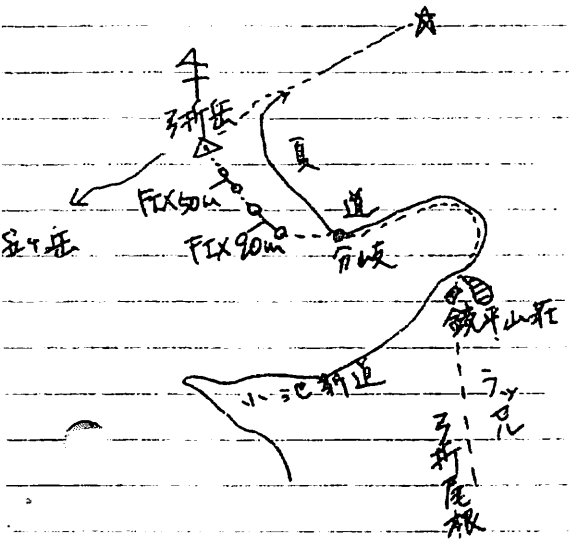
KYOKUTO

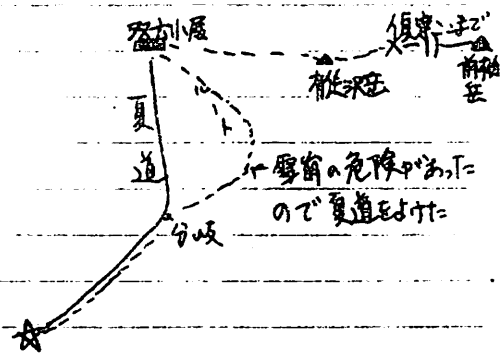
〈後発隊記録〉

11:00　　弓折岳 出発　　①
13:00　　双六小屋 到着　　①

〈偵察隊記録〉

12:35　　双六小屋 出発　　①
12:50　　樅沢岳　　①
13:20　　FIXロープ90mを残置して
　　樅沢岳直下 出発　　①
14:20　　双六小屋 到着　　①
　　メンバー：松本，花谷





12月29日　（金）　　5日目

5:00　　起床
6:00　　天候：吹雪（はげしい）
　　本隊決戦決定
　　偵察隊は天気図を取った後に出すかどうか考える
10:00　　偵察隊中止決定
　　天気図を書いた結果，スッ玉低気圧が
　　発生していて荒天が予想された

KYOKUTO

12月30日（土）　6日目

5:00　起床

5:10　天候：ホワイトアウト，風弱い
一時待機の指示

6:13　本隊沈殿決定
FIX隊待機

13:00　FIX隊中止決定
天候回復せず，行動は不可能と判断

12月31日（日）　7日目

5:00　起床　○

6:50　双六小屋出発

樅沢岳と前樅沢岳間のコルまでにFIX通過あり（90m）

8:00　コル到着　○

8:35　〃　出発

9:25　硫黄乗越到着　○風

9:35　〃　出発

1回休みの後，FIX通過あり 80m

千丈乗越の手前にFIXあり 20m

12:45　千丈沢乗越　○風

14:15　槍ヶ岳山荘到着　○風

〈FIX隊記録〉

6:15　双六小屋出発

7:00　1本目FIX（40m+25m+25m=90m）

8:30　硫黄乗越

10:20　2本目FIX（50m+35m=85m）

11:30　3本目FIX（20m）

12:10　千丈沢乗越

13:20　槍ヶ岳山荘到着

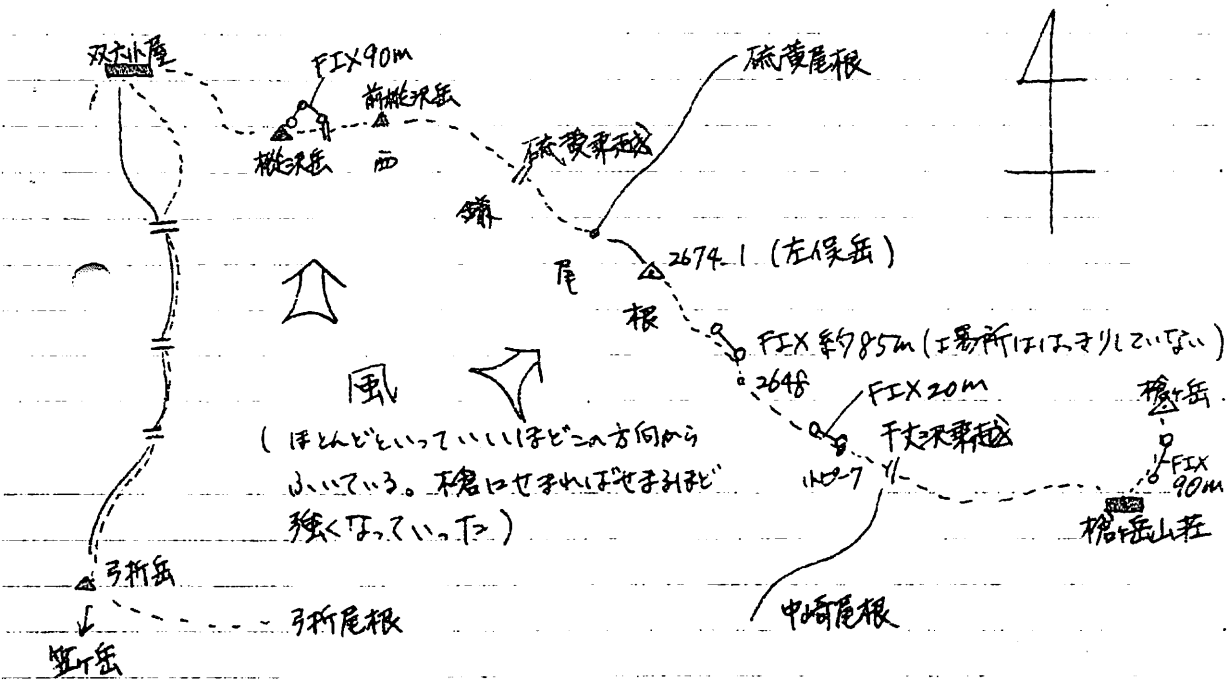
14:20　〃　出発

15:30　槍ヶ岳山頂（山頂までにFIXあり 80m）

16:00　槍ヶ岳山荘到着

メンバー：山内，前原

KYOKUTO



1月1日　元旦　（日）　8日目

5:00	起床		
5:30	天候：強風，ホワイトアウト 天候不良の為，一時待機に決定		
12:00	槍ヶ岳登頂決定		
12:45	槍ヶ岳山荘出発	○	強風
13:00	槍ヶ岳山頂到着	○	強風
13:30	〃　出発		
13:50	槍ヶ岳山荘到着	○	強風

1月2日　（火）　9日目

5:00	起床	○	
6:50	槍ヶ岳山荘出発	○	
7:30	中岳山岳到着	○	
7:40	〃　出発		
8:15	横尾尾根取付到着	○	
9:17	〃　出発		

FIX通過あり　(180m)

10:00　天狗のコル上 到着　○

10:35　〃　出発

P8～P7間に懸垂下降あり (25m)

P6～P5間 FIXあり (100m)

15:30　3のガリーのコル　○

3のガリーは雪崩ヒモを出して1/3おきに下降 3のガリーまで残置ロープで懸垂(200m)

16:00　夏道との出合 到着　○

16:20　〃　出発

17:00　横尾 到着　○

<FIX隊記録>

6:00　槍ヶ岳山荘出発　○

7:00　中岳 山頂

10:00　横尾尾根 P8

・取付～天狗のコル間 FIX 130m+50m=180m

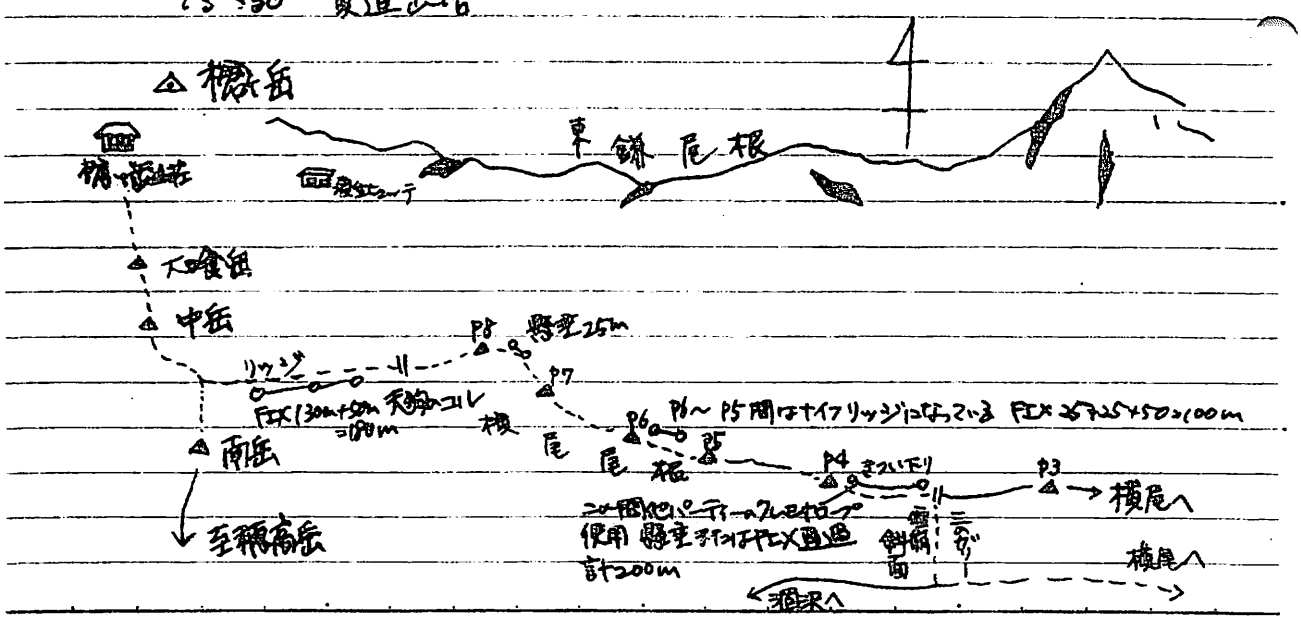
・P8～P7間 懸垂 25m

・P6～ FIX 100m

13:30　P4付近　残置ロープ 50m×4=200m

15:00　3のガリーコル

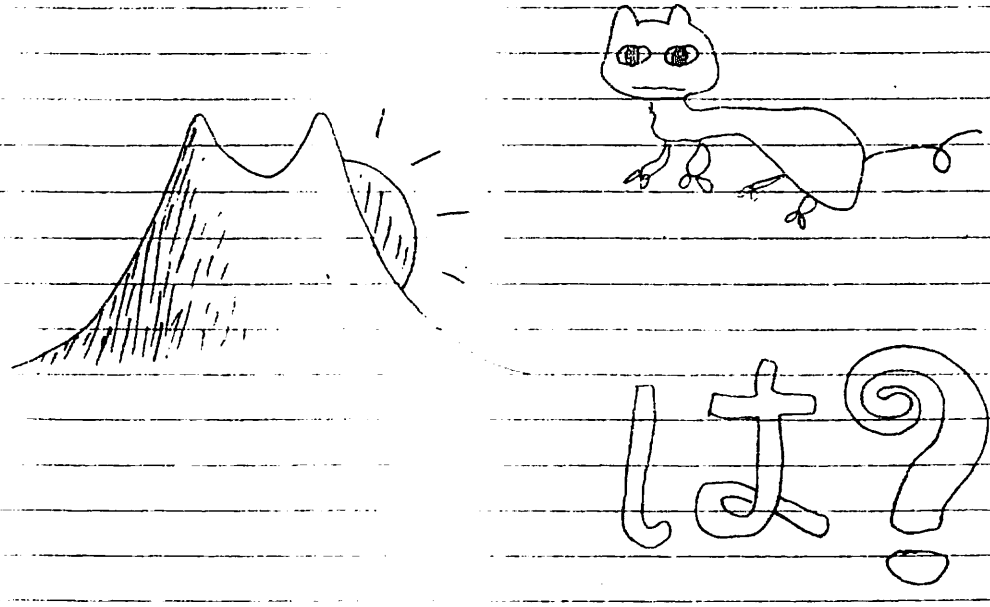
15:30　夏道出合



KYOKUTO

1月3日　(水)　10日目

5:30	起床	○
6:55	横尾出発	○
7:45	徳沢到着	○
7:55	〃 出発	
8:35	明神到着	○
8:45	〃 出発	
9:25	河童橋到着	○
9:35	〃 出発	
中の湯までレース		
10:20	中の湯到着	○
11:10	〃 出発	
11:30	坂巻温泉到着	○
12:45	BOX到着	



KYOKUTO

冬合宿・装備係の反省　　担当　前原 徹

・スリングの数を確認しておきながら多く持って行き過ぎた。
・ローソクは停滞の日ほど多く使用することが理解できた。
・テントのポールが老朽化がはげしいのか、すぐに破損していた。

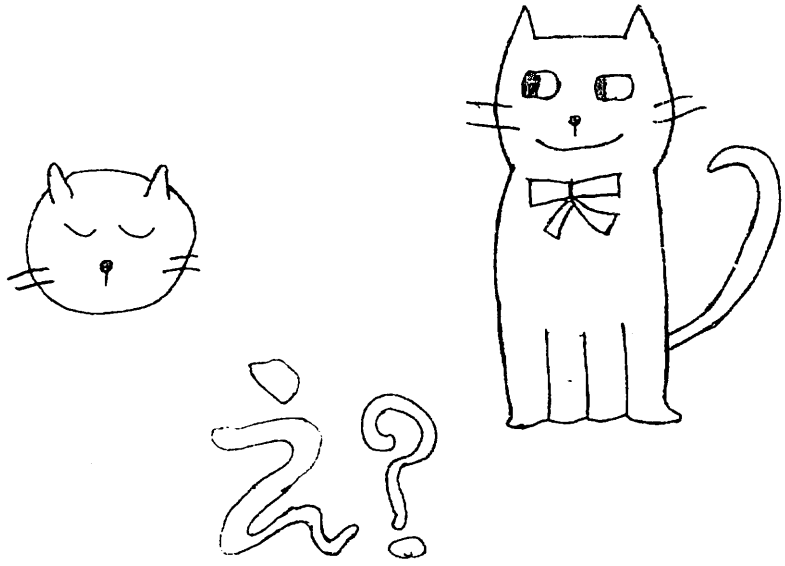
・ホワイトガソリンの残量 5600 ml
　9600 ml ／ 10泊 ／ 11人 ≒ 87.3 ml

※プレ冬合宿と比べて格段に消費量が少ないのは疑問である。

〈損失・残置等〉

・テントポールセット ×2 ⇨ 老朽化
・竹ペグ ×1 不明
・マンドリン × 3針 損失
・メタ × 4本消費
・カラビナ × 1枚紛失
・ローソク × 6 1/3 本使用
・赤リボン × 少量使用
・スリング ×2本⇨1本は残置
・おたま ×1コ 破損
・天気図用紙 × 8枚使用
・高層天気図用紙 × 1枚使用
・予備電池 × 6本使用
・竹ポール × 15本残置

・雪袋が古くて、水を作るときにゴミくずが多く出ると指摘を受けた。現在使用している土のう袋はそれなりに意味があって使用していると結論が出たので土のう袋を新調することで解決できるだろう。
・ラジオも好・不調を確かめてから持って行かなければいけないと思う。機能しなければラジオとして意味が無いだろう。



エッセンの反省と感想　　記岸 秀蔵

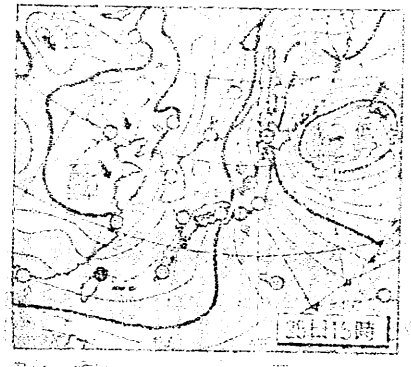
プレ冬の反省を生かし切れたと思う。軽量化を図ったため、量がかなり減ったが、全体的に行動には差しつかえなかったと思う。朝のラーメンを1袋忘れたのが一番の反省点である。調味料の量が全体的に少なかったのも失敗だった。

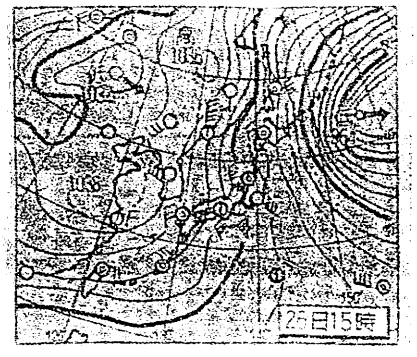
係として（医療）　長澤 徹哉

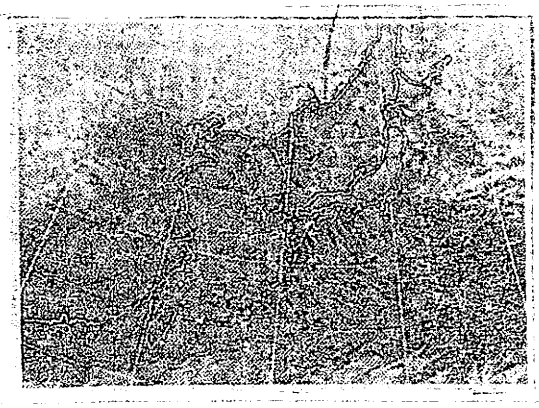
医療品を開けることなく、本隊に大したけがもなく下山でき、よかった。今年も無事で過ごしましょう。

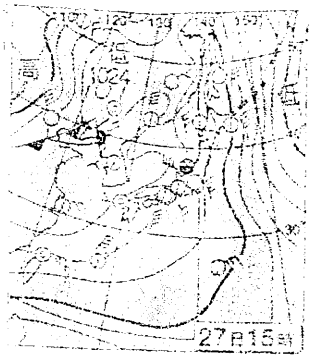
記録係から反省　　花谷 泰広

今までの合宿とちがって、係が全部の記録をとる方向でやってみた。別に問題はなかったと思う。報告書にはどこにどれくらいキエメを使ったかを図で示してみた。今後の山行、合宿の役に立てたらいいと思う。記録は係だけがとるものじゃなくて、全員がとっておくべきものだと思う。習慣にしておくべき事ではないだろうか。

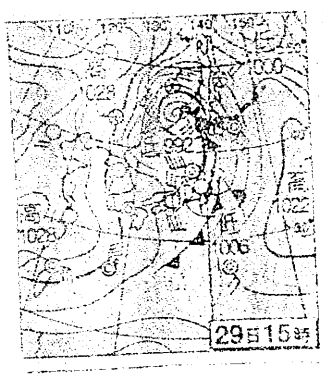

25日15時

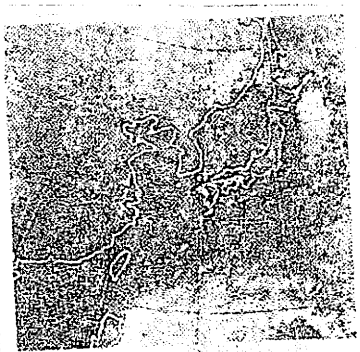

25日15時



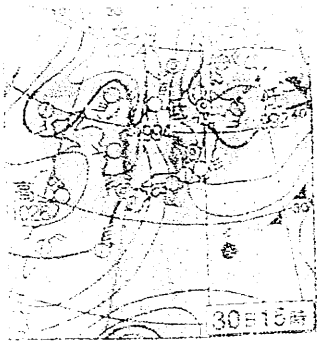


27日20時 ひまわり5号撮影

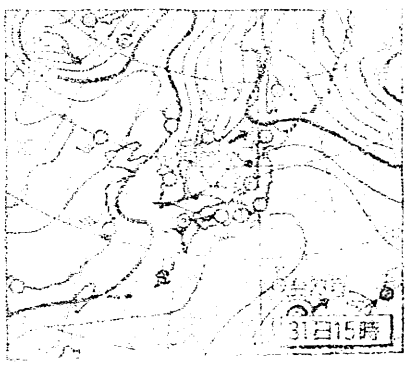


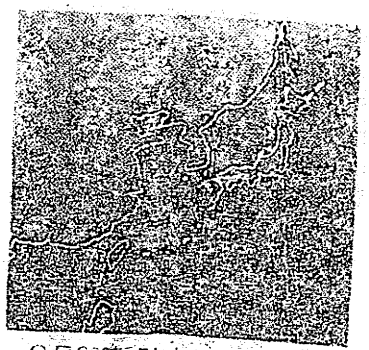


29日20時 ひまわり5号撮影

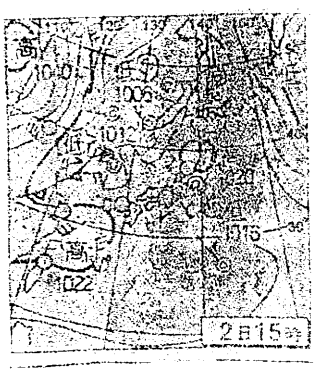


31日20時 ひまわり5号 撮影





2日20時 ひまわり5号 撮影



[illegible] 太郎

収入 20000 [illegible] 22,000
[illegible] 3000
[illegible] [illegible]
[illegible] [illegible]

合計 226,110

支出 [illegible] 減価償却費 [illegible]
[illegible]
[illegible] [illegible]
小計 [illegible]

[illegible] [illegible] 1337
[illegible] [illegible]
[illegible] [illegible]
[illegible] 410
[illegible] [illegible]
小計 [illegible]

交通費 青春18キップ 24,860
[illegible]
大学－松本駅間 2,190
[illegible]－新橋間
22,770
[illegible]
[illegible]－[illegible]間
40,170
小計 89,990

合計 203,533

差引 計算上では22,577円だが、実際には 32,996の残高となっていた。よって不明金が10,419となった。

32,996－11,[illegible] ＝ 5000の返金

リーダー会議事録　　—冬合宿における反省点と今後への助言—

1．行動面

・25日　山内が橋の上で雪庇を踏み抜きあやうく川底に落ちそうになる　→雪庇は思いがけない所に思いがけなく大きく出ているものである。ラッセル交代の時は疲れており注意力が散漫になりやすいので、そういう時こそ慎重に行動すべき。山内は反対側によければよかった。

・25日　偵察隊が林道上の急斜面で「ドスン」という音とともに雪面の陥没を体験する。その直後に全員走って逃げた。　→雪崩斜面には同時に大人数で入らない。今回は3番目の人（松本）はかなり間をあけ先頭の危険地帯の通過を待っていたが、2番目の人（長澤）はほとんどつながっていた。

・26日　新雪の不安定なスノーブリッジの渡渉時、雪を踏み抜き fixロープに宙吊りになった場合、どう対応したらいいのか事前に打ち合わせしなかった　→対岸にも上級生が待機するなど、対応を考えておくべき。

・26日　同じ渡渉地点において、 fix通過後2名（山内・小林）が雪の落とし穴に落ち、自力での復活が不能となった　→事前に「そこはまだ危険だからその上まで行って待ってて」と指示があった（伊藤より）にもかかわらず、それを守らなかった。客観的判断はより正確で重要である。

・26日　同地点において落ちた2名を助けるために、岸が急ぐあまり fixを使わずに横断した　→二重遭難の可能性あり。どんな状況にも冷静に対応すべき。

・26日　沢の横断時の fix設置方法について、2本のロープの結合部は区間の途中にくるべきではないのでは？

・26日　弓折尾根下部の疎林帯は雪崩がこわかった　→忠実に樹林帯の中を歩く方がよかった

・27日　fix隊弓折岳直下の斜面において設置が遅い。山内がスノーアンカーで支点を作るのに手間取った　→慣れと経験の問題。Speedy is Safetyを忘れずに！

・27日　fix隊岸のリード時ルート選択の判断を迷い、雪崩危険斜面の中で長時間立ち止まる　→雪崩危険斜面では迅速な行動に限る。即座に判断し、疲れてもがんばる。

・27日　fix隊に上級生がとられ、設営班に1年5名と2年1名（前原）のみとなった　→鏡平という場所を考慮に入れた結果であり、問題ない。場所とメンバーの力量（行動力・判断力）を考慮に入れ検討すべき。

・28日　fix地点のルート工作（ラッセルおよびロープの掘り出し）に時間がかかった（山内）　→空身になるべき

・28日　残置した fixロープが一晩で完全に埋まってしまった　→埋まる可能性のあるところ（特になだれ斜面上など）には残置しない方がよいのでは？　ケースバイケースで判断しよう

・28日　弓折岳で先発隊・後発隊に分けた　→その後の時間短縮につながりよかった。ただし先発隊の方を人数が少なくなるようにする。逆になると後発隊が精神的に焦って行動してしまう可能性があるため。

・31日　fix通過中長澤が落ちる　→急に雪面が陥没しそれに足をとられたためだが、それも重大事故へとつながる滑落の一要因となりうる。細心の注意を

・31日　fixの支点が一か所完全に浮いており、そのまま全員が通過した　→ fix隊（山内・前原）のミス。本隊の先頭も支点をすべて確認するべき

・31日　千丈沢乗越の手前から槍の肩まで一度も一本をとらなかった（1時間45分間）→すごい強風のため適当な場所がなかった。しかし一日の行動の最後に近い時に事故は起こりやすいから、どこかで休むべきだったのか。強風の中で休んで果たして疲労がつのるだけにならないか。ケースバイケースで適切な判断を

・31日　最後に飛騨沢の上部を直上した　→それほど雪崩がこわいところではなかったがより安全なルートをとるべき

・1日　9時半ころからガスが取れてきたが、その把握が遅れ行動開始は12時を過ぎた→この日の場合はどのみち槍のピストンだけになっていたが、もし fix隊を出す場合などのことを考えれば、かなりのロスがあっただろう。実際肩ではまっすぐ歩けないほどの強風であったが、槍の穂先に近づくとそれほどでもなかった。随時そこまで偵察に行くなど、待機ー行動の判断は慎重に正確にするべき

・1日　待機中靴を脱ぎシュラフに入っていた　→短時間の好機を逃さないため、待機中はすぐに出発できるよう準備万全にしておく

・1日　fix回収隊（山内・前原）インクノットはずし忘れて下降　→初歩的なミス。あのような強風という悪条件の中でこそ正確で迅速な行動が求められる。

・2日　長澤、磯部のアイゼンを過って履いて先行する。そのため本隊の出発が20分ほど遅れた　→長澤の重大な過失。ガチャ類はピナですべて連結しておくという決まりを守っていなかった。その点では磯部も同様。同情の余地なし

・2日　fix隊（伊藤・長澤）設置が極めて遅い　→長澤の不慣れと経験の少なさゆえ、仕方ないこと。

・2日　fixの途中の支点について、残置ハーケンがあるにもかかわらずかん木でとった　→残置ハーケンだけに頼るのもよくないが、確認した後に積極的に活用すべき

・2日　fix中の特に危険な部分でかなりランアウトしていた　→途中支点を取ろうと思えば取れたというので、ぜひ取ろう

・2日　懸垂下降に残置ロープを使った。支点の安全を確認しないで　→ fix隊はもちろんのこと、本隊の先頭も必ず確認する

・2日　本隊のすぐ前を先行していた fix隊は、本隊に対し必要な指示を与えずにどんどん進んだ　→急斜面の下降箇所において、残置ロープで fixか懸垂か、明確に指示を出すのも fix隊の役目。

・2日　fix隊は fixロープを使い果たした後もそのまま前進した　→本隊と合流した時に本隊からロープを受け取るべき。使いたい時に本隊を待ってから設置するのでは時間のロスになる。

・2日　樹林帯に入ったらどこでも幕営適地はあるだろうと考えていた　→実際はまったくなく、事前研究が不足だった。

・2日　三のガリーの下りについて　→時刻的に焦ってはいたが、斜面の弱層テストはするべきだった。メット、なだれひもをつけ最低1分の間隔をとったが、もっと間を開けた方がよかったのか。しかし雪の状態から雪崩は起こらないだろうと判断したのでこれでよかったのか。ルンゼに完全に一人のみ入るというのが最もより安全策だろう。

2．生活面

・26日　テントポールがバキバキ割れた　→設営時は無理な力をかけずやさしくやろう。しかしもう寿命なのかもしれない

・29日　朝のエッセン中に雪袋が空になった　→翌朝使う雪は前夜のうちに準備しておく

・28日～高層天気図作成のための放送（短波）が入らない　→ラジオの不調か　寒気の状態を把握するために長期間の冬山山行では大切な情報なだけに確実に聞けるようしたい

（松本）

☆個人の反省と感想

冬合宿の反省と感想　　4年　松本穂高

プレ冬での反省点だった高層天気図の読図は、事前に勉強していったためかなり進歩したと思う。自分での予報もだいぶ確率が上がった。

事前にルートの下見をしておいたのはとても役に立った。ただ横尾尾根は誤算だった。樹林帯に入ればそれほど危険なところなどないだろうと高を括り、かなり楽観視していた面があった。それが一番の反省点である。横尾尾根の日は、天気と農大パーティーに救わ。れた。

感想としては、とにかく事故がなくてよかったと思う。無風・快晴の下での稜線歩きは本当に快適だ。厳冬の北アルプスの、あのすっげー景色を間近で見た時は、とても幸せだった。いつ行っても何度見ても、やっぱり冬山はすばらしい。下界でチャラチャラ遊んでるそのへんの若者って、かわいそう・・・・

硬派一徹　山が恋人

冬合宿の感想と反省　長澤 徹哉

何といっても全行程を歩き通せたことがうれしい。3日間の停滞をくらっての完走が果たせた。槍が岳での元旦もオツなものであったし、最終日の横尾尾根は皆、風となって下りてきた。

12月は体調をくずすことがままあって、体力が耐えうるのか気がかりであったが、隊におくれることなく帰ってこられたのでよかった。安心することなく訓練はしていきたい。

雪上での確保(fixロープ張り)が練習できたのは収穫であった、また反省点はこれにしぼられる。斜面での作業に恐怖し手際が悪くて、初め本隊を待たせたのがまずかった。これは最後に自分がリードしたときには手際よくできたのである程度の改善がみられたように思う。

冬合宿の反省と感想　　伊藤勇太郎

まず冬合宿が無事に（これが一番大事）そして成功に終ったことが何よりもうれしい。まったく何年ぶりの成功なのだろうか？
行程的には古賀さん達の薬師～槍～横尾尾根に比べたら（この歩いた記録は大いに参考になった。）半分でありましてや荷物も30kgなのだから1代は変わっていると思った。
西鎌尾根の最後の千丈沢乗越からの長い登りとトラバースで2年前の遭難を思い出し、何度も何度も1年生に対して『落ちないでくれよ。落ちるなよ』祈るような気持ちで登った。そんな心配もよそに皆しっかりした装備で歩き通していた。そして念願の槍のピークにも元日に立つことができた。
この合宿を通して各メンバーとの距離も少し短くなったような気がするのもまたよかった。

さて私個人の反省点としてやはり槍から横尾尾根のFix隊の行動に問題があった。定時半のシーバー交信を何度かおこたったため、本隊に先のルートの情報が伝わらなかった。前日の農大の残置と思われる残置のFixを使用する時にたぐるだけでなく、雪にうまった支点を掘り出して確認しなければならなかった。こういう所で確実なFixという大前提がくずれてしまい、Fix隊として失格だったと反省している。
3ルンゼの下降の判断に対してその後も議論がなされたが、こういうのは経験によるものなので、今だにわからない。結果的にはあれでよかったかもしれない。また3年生になって今だにスパッツに穴を開ける自分がちょっとなさけなかった。

1・2年生は言われたことをわりあいこなせていたと思う。この成功をステップにバリバリ登りましょう。

最後に古賀さん、埴埴さん、藤江さん、伴野さん、三木さん、松沢さん流さん、博多さん、上山、原ちゃん。酒やクリスマスケーキをはじめとしてたくさんのカンパありがとうございました。

冬合宿の反省　　山内哲文

今回の合宿で僕は、冬山では常に死と紙一重の所に人間はいるんだと実感してしまった。本当に小さな油断やミスが大きな事故を招くのだ。たとえば、橋の上の雪ぴに気づかなかったり、降雪直後のなだれ斜面を「まいっか。」と思ってトラバースしたり、川岸にはりだす雪ぴに気づかなかったり、重いザックをしょってけんすいする時にザックに引かれてバランスをくずしたり、というような事だ。たいがいの事故はそういった心にスキができた時に起こるものだと思う。常に緊張して心にスキをつくらない事はほとんど不可能だが、大切な所はしっかりおさえて、いつも頭を使ってあらゆる危険を予測しなければいけない。そのためには僕はまだまだ経験が足りない。雪崩の危険のある雪質・状態はどんなか？雪ぴはどんな所にできるか？等わからない事がたくさんある。

それから一年生は、言われた事は最低限きちっとやってほしい。Essenの時、軍手はめるとか なべをはなさないとか、ガスいれをヌトでやるとかガチャ類はじゅうぶんなげとくとかである。どれもささいな事だが、ちょっとまちがうと大変な事になってしまう。

感想　　山内　哲文

僕は西鎌尾根のfix隊に出た時が楽しかったです。人の通った後のトレースをたどるのではなく自らがトレースつくって道を切り開くというよろこびがあった。しかしそれだけにFix隊に要求される技術は多い。スピーディーな体力、スピーディーな判断、スピーディーなザイル操作スピーディーかつステディーなま点づくり、センスあるルートfinding などである。いきなりラッセルがでてきたり、本隊がすぐ後ろにせまってきたり、前原がツルツル文句いいだしてきれそうになったり（きれはしなかった）カバームデスな斜面がでてきたりした時はちょっと困ったけど、皆より一足先に稜のピークにたった時は"イッヒビン グリーグリッヒ"（独語）だったぜ!!

No.

Date

冬合宿の反省と感想　　記岸 秀蔵

今回で2度目の冬合宿を経験したが、新人合宿、縦走合宿、夏合宿、プレ冬合宿と通して積み重ねてきた経験を存分に発揮することができたいい合宿だったと思う。去年の合宿では不完全燃焼のまま終った部分が多いにあったが、今回の合宿の成功によって今まで積み重ねてきたものの重要性をはっきりと認識することができた。

自分自身の反省点としては具体的に書くと、2日目の縦しょう中に山内さんがスノーブリッジをふみぬいて落ちた時慌ててフィックスをせずにかけ出して行ったことだ。自分ではだいじょうぶだと思っても他から見れば危険な行為をしているという事はしばしば起る事なので充分気をつけたい。次に弓折岳直下にフィックスを張りに行った時、じゃしてもらってトップで行った際に雪崩が恐いのと「進まなければ」という責任感みたいなものとで動けなくなった時だ。あの時は判断力が鈍ってしまい非常に危険だったと思う。安全な所までとっとと降りるべきだったと思う。冬山での雪崩の判断というのはとても難しい物だという事が分かった。

西鎌尾根も夏歩いた時とは全く別の尾根のようになっていて、恐いと思う所が多かった。槍の登りはたりした事はなかったが、強風にはまいった。横尾尾根では、天気に恵まれて良かったが、もし少しでも風が吹いたり、ガスっていたりしたらどうなっていたか分からないだろう。冬山では危険がいっぱいあって気の安まる瞬間がない。幸い今回の合宿ではアイゼンを引っかけてコロブとかスリップしてパンツに穴を開けてしまうというような事もなかったので良かった。また手や足の凍傷にも気を配っていたので人ともなかった。体力の消もうは激しかったがシャリバテもあったと思う。いろいろあったが、合宿の成功によって充実感は非常に大きい。

冬合宿の反省と感想

Ⅱ年 前原、徹

反省 ⟶ ・2年生になってかえってだらけたのか、個装のおき場所が分からなくなったりして困ることが多かった。また個装を無くすこともあった。情けない。

・トレーニングをさぼっていたので体が思うように動かなかった。そして扇の小屋でまたしてもカゼ気味になってしまった。最近は山に行く度にカゼ気味になってしまう。たるんでいるからであろうか。

・横尾尾根を計画段階で甘く見過ぎていたような気がする。今回、すでにトレースされていたから良かったものの、P4からⅢのガリーのコル間等不安定な雪が大量について不規則な雪ぴがあり、ルートファインディングも難しそうであったため下手するともう半日以上は時間がかかったのではないだろうか。悪天の場合、横尾尾根の下降自体あきらめなければならなかったと思う。やはり行ったことのないルートに行く場合は、かなり余裕を持った計画にすべきであろう。

・雪崩の判断がほとんどできなかったと言える。なんとなく大丈夫だという感じで行動していたと思う。判断のできない人はいつ埋まっても仕方が無いだろう。

感想 ⟶ ・冬合宿が成功したのは数年ぶりだと聞く。晴れた日は必ずしも多くなかったがFixの箇所が多い日に好天の日が重なったのは幸運だったと思う。運を味方にするのも実力のうちと言われるが、それだけに合宿の成功も嬉しく思う。

・槍の穂先や上高地、大正池等のview Pointで晴れていたので良かった。景色を楽しむことができると次の山行への意欲も湧かせてくれると思う。あの寒い大正池で魚が元気で泳いでいたのは驚いた。

・西鎌尾根でFix隊で出動したときが最も充実していたし楽しかった。Fix隊で出動の機会がある人は積極的に行った方が良いと思う。その方が絶対に楽しいと思う。

・自分自身、昨年と比べて、また1つ前の山行と比べて成長しているのかどうかと疑問に思うことが多い。人間、短い期間では目立った成長はしないのかもしれない。しかし4年間という短い期間しか自分にはないと常々思っている。そしてもうすでに後2年程度しか残っていない。次々と進歩しないといけないというあせりも強くある。そういう訳であまり進歩した感じのない自分には、自分自身からの不信感もあるし、もどかしくも思う。

1995 冬合宿 反省と感想 磯部和哉 Date No.

今回の合宿は、プレ冬に比べさまざまな点で技術が向上した。しかし、反省点も出てきた。まず槍の肩の小屋では、小屋の中だから、ばらばらにならないだろうと思って、ガチャを通さずにかためておいたら、朝になってアイゼンがなくなってしまった。このことから、以後どんなときでもガチャはひとくくりにしておかなくてはいけないと感じた。2点目は、アイゼン歩行のとき、注意していないと足をひっかけてしまうことだ。これは、今シーズンはアイゼン歩行の山行をたくさんして無意識のうちに歩けるように慣れるしかないだろう。3点目がラッセルで、プレ冬の時よりはずっと良くなったものの、急なのぼりでのラッセル交代時にセカンドの分でつかれて、トップになるまで時間を要してしまうことだ。これはチームワークの向上が必要な事なのだが、個人としては、体力をより一層つけていくことが重要だと感じた。4点目が天気図をまだ上手にとれないことで、等圧線もひく練習をしたい。双六小屋の2泊目の夕方自分がとった天気図から、翌日は悪天を予想したがこの日は絶好の快晴となり、少々の風はあったものの面鎌を抜けてしまえた。天気図を読む技術も低いことに気付いた。1月2日は槍の肩より、横尾根経由で横尾の小屋までの行程であったが、すばらしい好天に感動した。

反省：冬合宿の行動一日目、僕は具合が悪かった。
温泉街を過ぎ、ラッセルが始まると、まともにラッセルもできず、本隊を止めてしまったりした。不調の理由は、出発までの食生活や睡眠が不安定だったためだと思っている。しかし、基本的には体力の不足が大きいと思う。反省しています。
二つ目は、Fix通過の際、後ろの人にcallを忘れたこと。一回目の時に注意されたにもかかわらず、二回もやってしまって反省しています。
三つ目は、本隊がテン場に着き、ラッセル兼テイサツ隊を出す際に、一度もそれに加わろうとせず、また加われなかったこと。体力に余裕のないことを恥ずかしく思いました。

感想：冬合宿にのぞんでの最初の気持ちは、遠征前の大切な勉強の場である冬合宿を100％消化しようというものであった。しかし、思うようにいかず僕の中では未消化のままである。でもやはり、冬山は、厳しく、美しく、楽しいところだと思った。
今後は、その冬山にたくさん入って経験を積みたい。

小林 茂幹

冬合宿の反省、感想

〈反省〉

プレ冬に比べてだいたい何を、どうやったらいいのかを理解できたので全体的にはだいぶスムーズに動けるようになった。ただ、忘れ物をしたり、勝手な事をして穂高さんにおこられた事があった。今後ないようにしたい。行動中の事だが、まだアイゼン、ワカンをスパッツにこすって破ったりした。まだまだ歩き方がなってないと思った。個人山行でこれらの点を直していきたい。

〈感想〉

まず槍ヶ岳の頂上に立てた事がうれしかった。初登頂だったのもあって本当に良かった。あと、大変美しい景色が見られたのもよかった。何年かぶりで合宿が成功した訳だが、これをステップにしてさらに困難な山にチャレンジしていきたい。

花俗　教広

冬合宿の感想と反省　　堺崇行

- 横尾尾根のFixのところで少しこわいと思うところがあった。
- ラッセルはやっぱりきつかった。
- エッセンの時もっとてきぱきとやるように気をつけよう。
- まだまだ体力不足のような気がするのでトレーニングをして健康な肉体を作ろう
- 天気図の練習をもっとしよう。
- 日焼け止めはくらいるにもたっぷりぬろう。皮がむけてしまった。

プレ冬合宿　反省と感想
花谷　泰広

〈反省〉
一番反省しなければならないのはエッセン等テント内での生活であると思う。初日のエッセンなどではほとんど2年生がやっていたという状態で、とても情けなかった。本当に何をしていいのか頭では分かっていたつもりでも実際やってみると全然できないということが多すぎた。2日目以降は積極的にやったつもりだが、まだまだ不慣れな所が多すぎると思うので、冬合宿で完璧に身につけたい。
二番目の反省は指に軽い凍傷を負った事である。おそらく一度の凍傷の手前であると思うが、3日間ぐらい手先がおかしかった。写真を撮ったりした時に素手になったのが一番の原因だと思う。オーバー手袋ははずしてはいけないということを再度考えさせられた。
以上の反省を冬合宿に生かしていきたいと思う。

〈感想〉
一日でもはやく冬山に登りたいと思っていたので三日程前から大変楽しみだった。とにかく山に登りたいという気持ちが強かったのでとても楽しかった。体力トレーニングをやっていたので特に息が切れるという事もなかったし、荷も軽かったので、バテる事がなく良かったと思う。これからはもっともっと困難な所に挑んでいきたいと思う。

KYOKUTO

No.

Date

～冬合宿の感想・反省～　　原田 亮介

雪山の景色はすばらしかった。特に槍の肩から出発した日の朝、ふり返ってみると槍ケ岳が真っ赤に染まっていてきれいだった。夏山は下界のにおいが残っていたが、冬山はまるで別世界だと感じた。

今後の課題はまず体力だ。深い雪の中でのラッセルの厳しさを知った。それからアイゼン歩きに慣れることだ。合宿中アイゼンで歩くことが多かったが、どこかにひっかけはしないかとかつまずいて転ばないかとか考えてばかりで慎重に歩き過ぎて遅れてしまうことが多かった。今後は意識して上手に歩けるようにしたいと思う。

信州大学山岳会 岩トレ規約

（1995年12月9日改正）

1．岩トレとは、岩登りのゲレンデにおいてザイルを用いて岩登りをすることである。

2．登攀具は事前によく点検し、必要かつ十分な装備を持参する。

3．単人で行くときは、他の部員にできるだけその旨を伝える。

4．服装は行動しやすいものを着用し、ヘルメット、袖・襟つきシャツ、確保時の手袋に関しては、上級生部員の判断により必要に応じて着用する。またヘルメットは岩登り用のものに限る。

5．岩トレ中はザイル、シュリンゲ等の破損に注意し、岩トレ後は装備のチェックをし、団装は必ず翌日までに所定の場所に返却する。

6．岩トレ後は「岩トレノート」に必要事項を記入する。

7．岩トレ中の事故は大小を問わず必ず岩トレノートに記入し、リーダー部員に報告する。その際、リーダー会が必要と判断すれば事故報告書を作成する。

8．岩トレの人数、同伴者、場所について、岩トレ前に他のリーダー部員に許可を得ること。

①原則として二人以上とする。ただし、リーダー会で許可があれば単独も可能。

②２年以下はリーダー部員の許可が必要。

③１年は第二回合同岩トレ前は２年以上が二人以上同行する。また第二回合同岩トレ以降は２年以上が一人以上同行する。

④リードはリーダー会で認めた者のみ許可する。

9．部外者との岩トレは、他のリーダー部員の許可を得る。

10．本規約の認める岩トレのゲレンデは別表の通りである。なお別表に記載のゲレンデは本規約の改正なしにリーダー会において随時書き換えることができる。

11．別表に記載以外のゲレンデについては、本規約に準拠して、その都度複数のリーダー部員が検討する。

12．各人工壁におけるクライミングも本規約に準じる。

13．氷瀑登りについては本規約は適用されない。

別表

立岩、物見岩、尼厳山、奇妙山、鷹岩、狼岩、小川山、佐久志賀、城ケ崎、太刀岡山
三ツ峠

遭難救助に関する規約

（1995年　12月9日改正）

1．入山時に救助を求められた場合。

ＳＡＣ会員が各自保持している遭対プリントに従い、以下のように行動する。

①原則として計画外の行動をしてはならない。

②他パーティーの遭難に出会い、救助依頼を受けたときは原則的に断る（現場での判断は客観性を欠き、「二重遭難」の危険があるため）。物的援助は許容範囲内で行ってよいが、相手のパーティーと記録をとりあって確認しておく。

※遭対プリント‥‥ＳＡＣ会員全員が山行中、保険証控え、その他ビバーグに必要な用具といっしょにピンチカンに入れ保持し、遭難時の行動体系となるプリント。

2．入山時以外に救助を求められた場合。

①遭難者がＳＡＣ会員の場合

・遭対系統図に従い、すみやかに行動する。

②遭難者がＳＡＣ会員以外の信大関係者の場合

・救助活動は原則として学生部からの依頼によって行う。

・現地では警察、その他の組織と協力して救助活動を行うが、その活動範囲はリーダー会で決定する。

・救助活動は本人の意志を最優先し、決して無理な行動はしない。

3．遭難対策基金の扱い

①遭難対策基金は、会員の遭難・事故の際、会独自の判断で使用できる基金である。

②基金の管理は、リーダー会が行う。使用に際しては、リーダー会の承認を必要とする。

③基金の使用は、リーダー会で承認された山行における遭難・事故についてのみ認められる。

④基金の収入は、会員一人あたり年間6千円の負担による。

⑤基金の支出は、主に次のものである。

・遭難救助費用のうち、保険支払い限度額を超えた分について。

・遭難救助費用のうち、保険支払い対象に認められなかった分について。

⑥基金使用後のこれの返済は、当事者、当事者の保護者、及びその他一切の人から、これを求めない。

９５年度　総括

今年度のリーダーを終えるに当たって、この１年間の活動の総括を述べる。これは私の個人的な意見であることを初めに断っておく。今後の活動への参考になればうれしい。

私は、より魅力のあるクラブを作っていくことを目的とし、毎回の総会においてささやかな「はなし」をした。４月総会では、アメリカでは勤務時間が終わると上司も部下もなくなって対等な関係になるということを例に挙げ、山岳会でもそういう風潮があっていいと思うと述べた。「けじめ」につながることである。５月総会では、都知事が変わり政策が変わったことを例に挙げ、昔からの理不尽な伝統や思想は思いきって捨て、自分たちがよいと思う方向へ積極的に変えていこうと述べた。「改革・創造」の推進を訴えたが、今考えるとこれには補足が必要だ。現役の我々は決して自分たちだけで活動をしているのではない。ＯＢ、顧問教官、学生部、保護者などに支えられて活動している。だからそれらの人達の願いや期待を大事にするという前提があることを忘れてはいけないのだ。

また７月には、話し合いにおいて自分の意見を持って望むことの大切さを強調した。それまでの話し合いにおいては、自分の考えを表さない人が多く、それがクラブのより一層の活性化を阻害していると思われたからだ。しかしその体質は依然改善されず、より具体的にその意義を述べる必要があると思った。そこで10月総会において、高校までの部活と大学のサークルの相違点を挙げ、自分がクラブを運営しているという自覚を持てと言った。その自覚の芽生えこそが「山岳会に入っている」から「山岳会をやっている」への意識の変革であり、それができれば、おのずと発言は増えるだろう。

そして９月総会では、私がリーダーになってから一種テーマにしていたことを述べた。それはＳＡＣとしてのアイデンティティを持つことだ。ワンゲルともスキー山岳部とも社会人山岳会とも違う、信大山岳会らしさと誇りを大切にしようということだった。確かに入部者の３分の２近くがやめていくという現実は、現在の仕組みが今の若者には合わないことを示しているのかもしれない。しかしだからといって、それに合わせて昔ながらの大学山岳部らしさを失ってしまっては、もはや信大山岳会の名は語れない。たとえ部員が数人、いや１人になってしまっても、大学山岳部の精神は受け継いでいきたい――そう普段から強調していた。だから、岩トレ規約中にある「ゲレンデ」の制限を撤廃した方がいいのではないかという意見や、バイトのために合宿を抜けたり行かなくても許されるという考えに対しては、断固として反対した。それらは「安全第一」をないがしろにし、信大山岳会の中に脈々と引き継がれている精神を断ち切るものだからだ。

ところがこう述べると、それらは前に言った「改革・創造」と矛盾するものではないかと思う人もいる。しかしそれは違う。改革・創造は、それらの範囲内においてのみ考えら

れるべきものであり、先程のような例は、それを逸脱したものだからである。

次に、今年度の「めあて」に挙げたことはどのくらい達成できただろうか。

今年度のめあて
・けじめを持つ
・自分の目標を持とう

「けじめ」については、その時々に具体的な内容をたびたび言ってきたので、どういうことを目指しているのかは周知されたと思う。しかし上級生の指示に対しふてくされたような態度をとる者があったのは残念だ。しかしかなり達成されていたものと思う。また自分の目標については、各人に聞いたわけではないが、一部を除いてほとんどの人が持っていた。むしろそれを持っていなかった人はやめていった。特に1年生は各自が確固たる目標を持ち、それに向かって努力している姿が多く見られ、好感が持てた。「一部を除いて」としたのは、私にその努力がまったく伝わってこなかった人がいるからである。秘めているものはあるのかもしれないが、山に行くという行動が少ない以上、そう思われても仕方あるまい。もし目標を持たず、合宿でしか山に行かない人がいたら、皆にとっても目ざわりだしその人にとっても無意味でしょう。即刻やめなさい。

今年度残念だったことは3点ある。一つは海外での登山がなかったこと。私自身行ったことがないので大きなことは言えないが、海外の山はそんなに遠い存在ではない。ヒマラヤの7千8千mとなると話は別だが、ヨーロッパアルプスの山稜、ヒマラヤの6千m峰、ヨセミテの岩壁など、お金さえ何とかなれば決して夢物語ではない。「日本の山をもっと知ってから」と思っていると、私みたいに実行できずじまいで卒業である。後悔してます、ほんとに。もう1点は部外者との山行が少なかったこと。他のクラブの人といっしょに行くことで、違った技術や新しい知識が身に付くし、また山岳会を外から眺めることができる。その他にもメリットは大きい。井の中の蛙にならないよう、もっと積極的に部外者と行くべきだ。そして3点目は事故を起こしてしまったこと。山内の屏風での墜落事故だ。考えてみれば、たとえば私が1年の時には岩登りには非常用のハーケンを3本持つように言われていた。しかしそういう教えはいつのまにかなくなっていた。そのような安全対策・遭難対策は事故があると再確認されるが、何事もなくしばらく年月が過ぎると、とかくおろそかにされがちである。それではクラブの発展どころか退化である。人の振り見て我が振り直せるのが人間の特権であるはずだ。先輩たちや他のクラブの失敗例を研究して自分たちに生かすような努力がなかったのは残念だ。

以上いろいろと述べてきたが、この他にも細かいことで言いたいことはたくさんある。もうやめるけど。とにかく安全第一の前提の上で各人が挑戦し続けること、それが理想で、同時に私の願いである。今後のさらなる発展を期待します。

（松本　穂高）

信州大学 山岳会　会員名簿

1996. 1 改

松本　穂高	教－中社	4年	O型	松本市岡田松岡6-2 高橋ハイツ105		0263-46-8651
CL・松本地区長	92E3109C	S48.12.28		茨城県つくば市梅園2-19-10	栄次	0298-51-4093
藤江　泰一	経済学部	7年	A型	松本市埋橋2-3-2 山田方		0263-34-6260
	24K211	S44.4.5		神奈川県横浜市戸塚区上柏尾町516	武久	
松澤　朋子	教－小国	5年	O型	長野市西町1048　たなか荘1		026-237-5254
	91E1012B	S46.11.22		埼玉県所沢市南住吉23-11	朗哲	0429-23-8054
伊藤勇太郎	農－森林	3年	O型	伊那市西箕輪羽広二本松2758-1	鈴木アパート	0265-76-7180
伊那地区長・保険	93A2005E	S50.3.14		群馬県藤岡市上落合384-5	正	0274-23-4807
上山祐貴子	教－小理	3年	O型	長野市妻科42-7　201号		026-237-7387
長野地区長・長野会計	93E1303K	S50.2.19		兵庫県西宮市塩瀬町4611-26	健三	0797-62-1866
山内　哲文	理－物理	3年	O型	松本市横田3-5-1 思誠寮		0263-36-3654
SL・サマテン	93S2038H	S49.12.21		大阪府羽曳野市桃山台1-7-13	佐太郎	0729-58-7644
長澤　徹哉	経－経済	2年	O型	松本市岡田松岡99　立沢アパート		0263-36-8927
松本会計・記録	94K0159E	S48.12.23		東京都板橋区宮本町43-11-405	克郎	03-5970-2750
前原　徹	農－森林	2年	O型	上伊那郡南箕輪村沢尻9565　白樺荘 202		0265-73-5992
特別会計	94A2051B	S50.11.17		熊本県上益城郡御船町辺田見449	久	096-282-2025
磯部　和哉	医－医学	1年	O型	松本市岡田松岡270 フレグランス小林B 102		0263-36-5896
サマテン	94M0007E	S47.6.4		神奈川県茅ケ崎市香川1378	邦雄	0467-52-3703
小林　茂幹	人－人間	1年	O型	松本市里山辺美里町1595太田アパート中棟東		0263-39-2441
サ協	95L1044A	S52.2.5		山梨県東八代郡境川村藤垈601	憲賀	0552-66-2215
堺　崇行	農－生産	1年	O型	松本市大村556 プレステージ芙蓉 105号室		0263-46-6348
部室整理	95A1036G	S51.9.15		福岡県筑紫野市大字原166-313 正憲		092-923-5215or4575
花谷　泰広	教－スポ	1年	O型	松本市蟻が崎6-24-2　こまくさ寮441		0263-36-3690～92
サ協	95E7103G	S51.8.6		兵庫県神戸市灘区六甲台町6-13-302	勝己	078-881-9370
原田　亮介	理－生物	1年	A型	松本市桐3-1-5 シンカイ荘7		0263-32-4359
部室整理	95S5019E	S51.8.26		愛媛県今治市新谷甲1470-5	富佐男	0898-47-3402

氏　名	学部－学科	部歴	血液型	現住所		現住所電話番号
係	学籍番号	生年月日		帰省先住所	保護者名	帰省先電話番号

救助本部　信州大学学生部学生課　担当：竹内（専門職員）自宅0263-72-4839、永井　自宅0263-32-1488

『作文』 磯部和哉

Date　　No.

信州に来てもうすぐ2年がたつ。あっという間のでき事だった。しかし、さまざまなおもいでもできた。山岳会に入って1年の合宿を終えた今、なんのために山に行くのかを考えるゆとりが出てきた。夏の縦走は、昨年同様北アルプスを北上し、栂海新道をぬけて親不知まで行くコースをとりたい。縦走はあまり楽しくない。何が楽しくないかと言えば、やはり荷物が重いことと日数が多いのでつかれがたまることだ。今年は、日程をあえて延長して、1日当たりの行動予定を少なくすることで、山旅を楽しむゆとりを持とうと思う。こうすればつかれが極度にたまることもない。食料は、軽いものにして、レトルトパックのようなのを利用したい。野口五郎でとなりのテントの人たちがうなぎを食っていたのが大変うまそうだったからだ。テントは軽いやつを選んでいけば軽量化になるだろう。今年は、ノートやカメラを持って行き、さまざまな記録をとることを計画している。山にはさまざまな動植物がいて、下界ではお目にかかれないものばかりだ。これを見ることは、山に行く楽しみとなるだろう。その他景色なども記録していけば冬山の参考にもなろう。縦走合宿は1年生のトレーニングの要素が大きいが、トレーニングは何も山歩きの体力だけではないはずだ。山に行くことの目的意識の面で自分なりの問題提起をしたい。今年の一年生が入ってくるか否か、どんな人たちかは分からないが、楽しくやっていきたい。

Theme 「忘れられた日本人」宮本常一著 を読んで、 1996.1.16

小林 茂幹

冬合宿へ、僕はこの本を沈殿グッズのひとつとして持って行った。そして夜の長い日、眠れない日、沈殿日などに、少しづつ読み進めていった。そして読み終わったのは、元旦、槍をピストンした日の夜のことだった。僕は人文学部で民族学をやることになり、このような本を手にしたのだが、民俗学（民族学）とはどのような学問なのだろうか。まだよくわからないが、この本を読んで、僕は、文字として残らなかった、あるいは、残さなかった人類の文化を考える学問なんだと思うようになった。先史と有史という言葉がある。これは、文字の発明を境に、人類の歴史を分けた言葉だが、有史時代になって以来、全てのものが記録されているわけではもちろんない。そこには書き手、おそらくその時代の上位に位置する人々の目から見えたものしか書かれていない。そして、それが教科書の歴史となるのだ。だが、そんな権力者たちの歴史とは、かけはなれたところで、文字を知らない人々は生きてきた。そして、そのような人々が、人類のほとんどなのである。私たちが、数百年前の人々の文化を知らないように、数百年後の人々は、私たちの文化を知らないだろう。この本は、著者が日本各地を巡って、土地の古老の話を聞き、それをまとめたものである。そしてその老人たちは、現代人と大きくへだたった価値感があった時代を知っている。それはその当時は常識と呼ばれ、意識されるものではない。だから、常識というものは文字に残らないため、私たちが、既に死に絶えてしまった時代の人々の考え方を知るのは非常に難しい。だが、その考え方を知ることの方が、教科書になる歴史を知ることより、はるかに重要ではないかと思う。最後に著者は書いている「私は長い間歩きつづけてきた。そして多くの人にあい、多くのものを見てきた。（中略）その長い道程の中で考えつづけた一つは、いったい進歩というのは何であろうか。発展とは何であろうかということであった。すべてが進歩しているのであろうか（中略）進歩に対する迷信が、退歩しつつあるものをも進歩と誤解し、時にはそれが人間だけでなく生きとし生けるものを絶滅にさえ向わしめつつあるのではないかと思うことがある。（中略）進歩のかげに退歩しつつあるものを見定めてゆくことこそ、われわれに課されている、もっとも重要な課題ではないかと思う。」と。

[ixi:z]

Welcome to my inspiration

眞 [illegible]

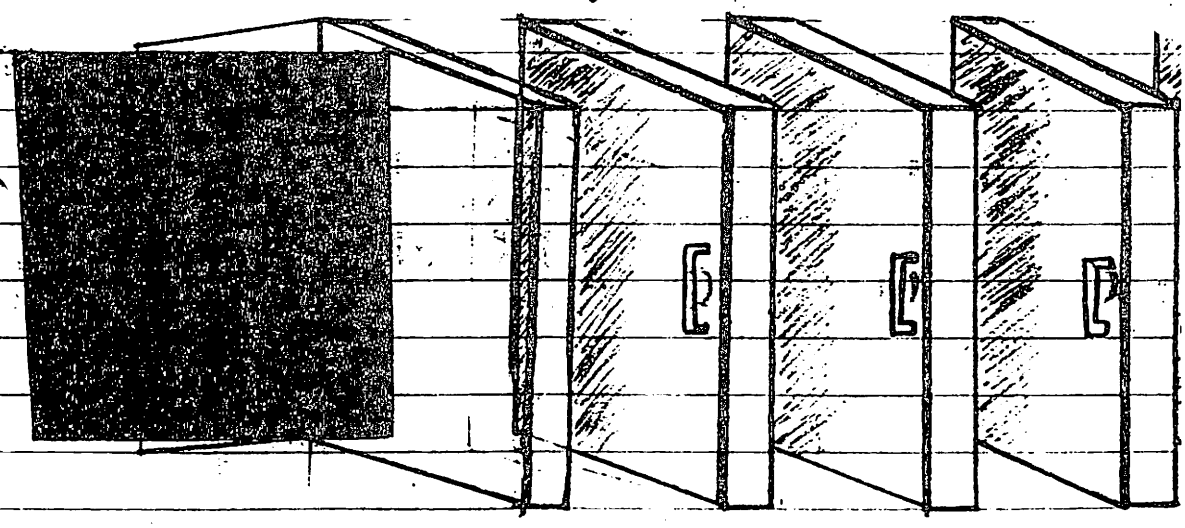
先日、福岡の親友から手紙が届いて、こんな内容だった。「Happy new year! [illegible] 男はロマンだ! [illegible] [illegible]はロマン派で行くぜー」by [illegible]
私は思った。「ロマンとは何だ!? アルカーヌ[illegible]と一体!?」それで国語辞典を[illegible]。ロマンとは、①[illegible]の構想、ドラマチックな筋立てを軸として、青春の叙情性に深く富んだ神秘性などを備えた[illegible]構成された物語。[illegible] これが [illegible] 物語を書かない[illegible]。ロマンとは、②厳しい現実(退屈な毎日の生活)に疲れた人々が潤いや安らぎを与えてくれるものとして求めてやまない世界。また、それを求める[illegible] 私は深い感動を覚えた。そうだ、今年は私もロマンチストになろう。[illegible]「ロマンチスト」[illegible]
私はその言葉に酔いしれた。今年は去年までの「[illegible]調・ナルシズム」(ホモ=同性愛を好む性的倒錯者の[illegible]ではなく、homo sapiens=知恵ある人の意)的なムードを一新し、炎のように燃えるロマンチスト、「ナパーム=弾」で行こう。「ナパーム」とはそう、「ナパーム・デス」の「ナパーム」である。デスメタルの頂点、アンダーグランドの帝王[illegible]
[illegible]で一年通して思ったことを書くとしよう。外は常に風が吹いていた。風の音色はまさしくメロディック・デスメタルの世界である。「嘆き哀しむ、荒れ果てた強風…灰のように冷たい毒のキス…」というような感じだ。叙情的なフレーズを奏でつつも猛烈に疾走する姿、メロディと爆発がわかち難く非常に入り組んだダイナミックな曲の展開、明と暗、そして静と動、激しさと叙情性といったコントラストが山ほどある。
私はこの世界を求めている。しかし「DEAD」的なものは好まない。

チョウ・ユンファは言った。「俺の頭に銃を向けるな！」
イングヴェイ・マルムスティーンは言った。「俺は誰の道化にもならないぜ」
あなたには、この意味が分かる？ 私は強くなる。そう、私は強くならなければならない。

Waitin' for the hidden war so they can go all the way
Waitin' for the hidden war so they can go all the way
and when I'm down on the ground they can go all the way
waitin' for the hidden war so they can go all the way
all the way ····

by Dizzy Mizz Lizzy

96' 1月 ドラエモン・コントに別れを告げる



- 「どこまでもドア」は自動ではない。
- 全国共通お米券はいつまで使える？

山男の生き方に関する研究

～山男と恋
男は夢に生きるべきか、それとも恋か～

A）男はやっぱ夢だよ夢、女なんか考えちゃだめ
B）お前、暗いやつやな－恋しなあかんで、やっぱ男にとって女ちゃーもんは
　　じゃ支えなんや、恋しとったらそれだけ夢にぶっかっていく気力
　　ちゃーもんも増大するんや
A）あほ。女がおったら夢の障害になるんや。お前山やっとんやろ。山な
　　んや行っとったら女ヨ立くそ
B）そらそうかもしれへんけど、そんなんゆーとったら何もできひんぞ
A）ほんなら何もせんかったらええねん
B）そういう訳にはいかへんやろ。やっぱ夢の大きさにほれて女ちゃー
　　もんはついてきてくれると俺は信じとる
A）それ甘いわ。お前甘すぎる。そんなんで女はついてこーへん。
B）そりゃお前顔悪いもんな
A）しばくぞわれ――　　けんか

あーあ、意見がまとまりませんでしたね。実のところ私は昔は夢に生きるべきだと思っていたのです。はい。でも最近そうじゃない。山男といえどもやっぱり男は男。男は恋をするものだと思うんです。で女性におぼれちゃいけない。しっかりと自分の夢を追いかけなくてはならない。それができない人間は恋しちゃいけないんじゃないかなと思う。それがキツいというなら夢をあきらめるしかないかな。少しきびしいかもしれないけど、みんなだいたい10年後には結婚してーるはず。その時の相手が大学時代に知り合った人というのは少なくないはず。そのためにも将来この人とならやっていけそうな気がするというくらいの人を好きになろう。そうすればどんどんやル気がでてきます。（変なヤル気ではないです）僕はそうなると信じてます。大人の人に言わせてみれば甘いかもしれないけど、それもまた夢の一つではないでしょうか。僕は恋と夢を両立させます。

山と女性を愛する
花谷　泰広

KYSKLITO

原田亮介

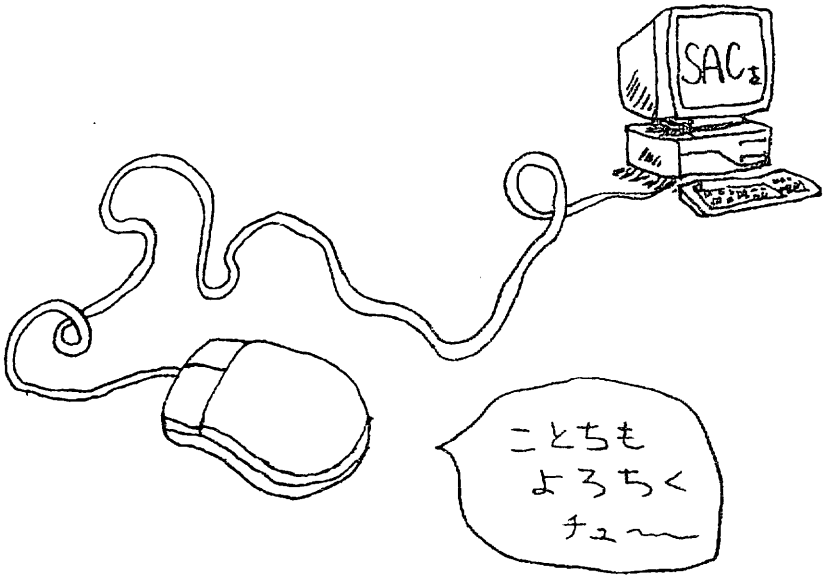
先日、静岡にいる友達が松本に来た。小学校からのつき合いで、高校のときにはたった二人しかいなかった登山部の相棒だった。小学校から中学にかけて彼を含む五、六人の仲間がいて、僕らは魚釣りとキャンプに夢中だった。移動手段は専ら自転車で、当時の僕らにとっては自由に遊びまわるには自転車が一番合っていた。自転車に釣り道具やキャンプ道具を積んで、愛媛の海に浮かぶ島にわたって五、六日間誰も来ないような浜を見つけて

遊びまくるのが夏休みの恒例行事だった。

どこでキャンプするにしても三日目ともなるとみんな釣りしたり、泳いだりすることにも飽きて退屈を感じるようになる。そうすると新しい遊びを考え出すことになる。下り坂の自転車レースをする奴。夜の焚き火のために一日中薪を拾う奴。僕はひるねばかりしていた。とにかく何をしても文句を言う人間はいなかった。大声を出そうが、エッチな話をしようが、ガスを爆発させようが僕らの自由

だった。

この三月にまたみんなで集まろうという話がある。学生だけでなく社会人もいるので何人集まるかはわからないが楽しみにしている。



1996年 1月

表紙 / 小林

編集 / 松本

印刷・発行 / 松本部会